

虎明本狂言詞章における語形が

注目される語詞の若干について

柳 田 征 司
(国語学研究室)

さら(脇狂言序1オ1) 「更に」の意。各類のはじめの序文いずれも「さら」に作る。「上手と下手は、性かはるべしや。さら其儀にあらず(わらんべ草三)」。平田篤胤の『古道大意』の例も報告されているから、大蔵虎明の個人的な用語ではなく、ある程度行われたものであるう。「なおなお」―「なお」、「はやはや」―「はや」、「よくよく」―「よく」に類推して、「さらさら」から生み出された俗語形であるう。

そさのおの御子(夷大黒2ウ2) 清原宣賢自筆『日本書紀抄』後抄本には、原典部に「素盞鳴尊」(左傍「ス 安氏説」)(上32オ)と仮名があり、抄文中に「疏云素盞鳴或作進雄」と仮名が付されている。万葉仮名「素」字によって「ソ」形も行われていたのであろう。「イツモノ大杜ト祇園トハ同前也ソサノヲノ尊ナリ」(天理図書館蔵日本神号之事也)

ヤドへ〇「カヘラフト」(右傍補入)ド云テ(夷大黒3ウ10) 「ウ」に後続する助詞「ト」が連濁を起こすことは室町時代に珍しいことではない。「今雨必ズフラウド云ゾ」(土井本周易抄一)など。鈴木博『周

易抄の国語学的研究』(清文堂 一九七二・三)参照。しかし、本資料の場合、「とうど」「ちやうど」など副詞の例、ならびに「百薬の長どして」(餅酒)の名詞の例は認められるけれども、助動詞「う」に後続する「と」が連濁した例は他に認められない。規範的な表現としては清音形だったのであろう。そうだとすれば、この「ド」は上の「ヤド」にひかれて誤って濁点を付したもので、補入が「ト」まで書いているのは、それを訂したものであろう。

うれしゆ御ざる(連歌毘沙門5オ2) 形容詞連用形のウ音便形を短呼する例は、ク活用の例ではあるが、ほかにも見える。「こゑをひくうたふ」(千鳥)「おもしろござつた」(同)。「捷解新語」に見えるシク活用形容詞「うれし御ざる」(二)「めづらしござる」(三)は、更に転化した形である。本資料では、「うれしう御ざる」の形が普通に用いられている(張だこ・三本の柱ほか)から、規範の形としては長音形であり、短呼形がたまたまここに顔をのぞかせているものと見られる。

あつは(連歌毘沙門5ウ4) あつば。感歎した時や驚いた時に発する

感動詞。「あっぱれ」の転じたものか。或は後掲の「わっぱ」ともかわりがあるか。

みう(連歌毘沙門6オ8) みよう。「みる」(見)に助動詞「う」がついた形はウ段形の「ミユウ」で現われ、「ミョウ」「ミヨウ」の例は見えない。「ミョウ」はオ段長音の開合が混同して生まれる形である。

ただし、語幹が二音節以上の語の場合は、「こり」「や」(右傍補入)「(悪太郎)にうかがえるように」、「コリュウ」と「コリョウ」と両形が行われていた。助動詞「よう」は「居る」(鍋八撥・麻生・附子など)「射る」(がんつぶて・禁野・い文字など)に接続する場合に限られている。語幹を保持するために「よう」が生じたものと見られる。

「いきよう」(生、文山だち)「きやう」(着、米市)「しよう」(蚊相撲)などは「イキョウ」「キョウ」「ショウ」であろう。大塚光信「助動詞ヨウについて——その成立と性格——」(国語国文 一九六三・四)参照。

ばいやうて(連歌毘沙門6ウ5) 奪い合うて。語頭狭母音が脱落して、濁音が語頭に立った例は「察化」に「どこもと」の例がある。「だく」(抱)「ばら」(薔薇)などが濁音形で定着したのに、「ばう」が一部の方言の場合を除いて定着しなかったのは、活用形式は違うけれども「いばう」(嘸)が存したからではないか。その連用形「いばえ」は「いばい」に転化しやすかった。

なんば(連歌毘沙門7オ6) 南蛮。字音語の入声音・促音や語末の撥音を脱落させて和語らしい形にしようとする動きの一つの現われと見られる。本資料には、「おぶく」(仏供、福の神)などが見られる。この動きに対して誤れる回帰が起きたものが「がしん」(餓死)などなのであるうか。

けなり(連歌毘沙門7ウ5) うらやましい。形容動詞「けなり」は、

語幹が一音節であるため、接尾語「さ」「げ」「がる」がつく時、その連用形についてはないか。そこからこれが形容詞に活用するようになった(鉢叩き)のであろう。北原保雄「形容詞「ヒキシ」攷——形容動詞「ヒキナリ」の確認——」(国語国文 一九六八・五)は、中古以前にはク活用形容詞の語幹末にイ列音が立つことがなかったことを説き、「ひきし」(低)が中世になって現われる語であることを論じている。「けなりい」も室町末期の例しか存しないようであり、「ひきい」が「ひくい」の形を生み出しているように、「けなるい」の形も見られるようになる。なお、本資料には「うらやましい」も用いられている。

わつはと(餅酒14ウ8) 「Yappato. 副詞。大声をあげたり、騒いだりする様子。例えば、ワツパトワメク。」(日葡)。「煩」喧ハ暑イコトニワヅラウテワツハトアラ暑ヤト云声ガカマビスシイ心ゾ」(詩字大成抄五)「手浅ナルワツハト言廻ル人ニモ隠密スベシ」(本福寺跡書)御めんなれ(餅酒15ウ3) 「御免あれ」が連声を起こしたものの。本資料では連声が表記上に現われることが多くないが、この表現は連声形で表記されていることが比較的多い。北原・吉見『狂言記拾遺の研究』は、『狂言記』の例について、「成る」という語構成意識があったためと解している。

やらん(餅酒19オ7) 感動詞「やら」は、「やあら」「やらあ」「やらん」の形(ロドリゲス日本大文典・日葡)でも現われる。これは、「にやあらん」の語形変化にひかれたものであるうか。

かんきん(餅酒19オ9) 寒気。語末の一音節の字音語に「ん」を添加した例は中・近世に少なくない。岸田武夫「近世語における撥音添加の現象について——主として連音関係について——」(近代語研究七 一九八七・二)参照。本資料にはほかに「がしん」(餓死、朝比奈は

か)「びくにん」(比丘尼、比丘定ほか)の例が見える。

千尋(かくすい21オ8) 派生語または複合語の下部要素の第一音節がハ行転呼現象を起こした例は、この時代に、ほかに「ヒトイ」(一日)が存する。

むつかしひ(昆布柿23ウ3) 面倒くさくて、厄介である意。第二音節は清音。なお、小早川本(古典文庫)には濁音形「むづかし」が見える。

ミヤウ(雁鴻金25ウ4) 「名代」の略語。筑紫の奥にも例が見える。

天正本狂言には「てい」(亭主)「ぬす」(盗人)「あを」(仰け)の略語が見える。蔵野嗣久「国語資料としての天正狂言本について——音韻表記の特徴を中心に——」(国語国文論集3 一九七二・六)参照。

みねんぐう(三人夫28ウ3) 御年貢。ロドリゲス『日本大文典』には

「ゴネング」の形が見える。「ねんぐう」と長音化した例は、本資料の他のところにも少なくない。ト書きの部分にも見える(筑紫の奥)。まんまとぬかれて(末広がり41オ9) 「うまうまと」の転で、首尾よく物事をしおうすことを表わすが、受身表現の場合には、ものの見事に何事かをされることを表わす。「今までまんまとたられた」(墨塗)

かまひて(鑑45オ8) 「構へて」の転。この時代には、「*tsu*」が「*tsu*」に転じることが盛んであった。本資料にも、「かいる」(ぬらぬら、蛙、ただし、見せ消ちとし、「へ」に訂す)の例が見える。

名おり(宝の槌52ウ6) 名折れ。不名誉。虎寛本では「名おれ」(岩波文庫上一三〇頁)と見える。

御ふしんの(宝の槌52ウ8) 「御譜請を」の連声の形に、原形を傍記したもの。本資料においては連声が表記の上にも示されている例はあまり多くない。

じやあった(目近籠骨56ウ9) 「にてあった」の転化形としては「じ

やった」が期待される場所であるが、本資料では「じやあった」「じやあらう」の形で現われる。「であった」「であらう」の転とする説もあるが、この形は、「御ざある」「御ざる」が並存する現象にひかれて、生まれた形なのであらう。形容詞の場合にもそのように解することのできる例が存することは、「棒縛り」の「よかあらふ」を参照。ただ、「じやった」「じゃらう」の形が本資料に一例も存しない点に問題を残す。

よばつて(目近籠骨57オ9) 前行には「よばつて」とあり、他のところでもその形で見える。その転化形かとも考えられるが、それでは、「呼び合ふ」の転の「よばふ」と混同する。誤写であらう。

びつくりとする(目近籠骨61オ9) 虎明本ではすべてこの形で現われる。これに対して虎寛本では「びつくりする」の形も一例見える。

念をいつた(三本の柱63ウ2) 「名をついた」(昆布柿)などの「ヲ格十自動詞」表現の一種の可能性もあるが、次行に「御念のいつた」とあるところから見て、「念のいつた」を連声と意識し、誤った回帰を生じたものと解すべきであらうか。

てちだい(三本の柱64ウ1) 手伝い。teudaiは、狭母音uをはさんで、同じ歯茎音t・dが存するために促音化しやすい状況にあった。

そこに *notido* (越度) のような入声音の語があったから、これに類推して「teudai」(日葡辞書)の形を生じた。開音節化が進んで、*notido* とともに *notido* が行われると、teudaiの形も行われたものが見られる。

おもたい(三本の柱64ウ5) 「重きをおもたきおぼたい」(片言)しんぞて(薬水69ウ1) 進じて。71オ8には「しんじ」とある。本来はサ変動詞であるが、下二段にも活用している。類義の「まらす」(参)が下二段とサ変と両形存するのに類推したものか。

こしめせ(薬水73オ7) 「聞こしめす」の音転化形。同音kが反復されることを背景に生じたものであろう。ロドリゲス『日本大文典』は、「聞こしめす」と比べて、「Coximesu (こしめす) は同じ意味であって、敬意の度合が劣る」(巻二)としている。本資料には、「きこしめす」一二例、「こしめす」一三例が見える。「きこしめす」の用例のうち九例は「聞く」意で用いられている。三例は、飲食する意で用いられており、大名が積尊の行為(文蔵)、舅が延喜の帝の行為(岡太夫)、臣下が帝王の行為(橋)について用いられている。これに対して、「こしめす」の方は、全例飲食の意で用いられており、ここの孫が祖父の行為について用いたほか、饅頭売が客(饅頭)、聾が船頭(船渡聾)、茶屋が客の出家(二例、大山伏)、為朝が姫鬼(三例 首引)、檀那が出家(魚説教)、妻が夫の勾頭(猿座頭)、後家が住持(寝替・時)、の行為についてそれぞれ用いており、ロドリゲスの言う敬意の度合いの違いを認めることができる。一例太郎冠者が主について用いた例(鈍根草)があるが、からかっているものである。この語については、亀井孝「敬語「こしめす」について」(国語と国文学 一九三五・一一) 同「鐘楼蝙蝠録」(二橋論叢40・1 一九五八・七) 参照。

むまひ(薬水73オ9) 本資料では、「ま」又は「め」が後統する場合の語頭のuは、「馬」「梅」の場合は「むま」「むめ」と表記されている。「美味い」は、「むまい」が多く、「うまい」の例も存する。「生まる」「埋め」は、「む」「う」がほぼ同数である(ただし、「埋め」の例は少ない)。

しひたる(煎じ物80オ5) 山本東本「しいたる」「したる」の長音化と見る説と、「仕入れたる」の誤写説とがある。「ひ」の仮名が用いられているところから見ると、「仕入れ」説は無理か。「強いたる」で、強く煎じたことか。

つくしうじ(牛馬85オ7) 「心を尽くし」に「筑紫牛」をかける。単独形は清音「ウシ」であるが、複合語になると濁音形であったらしい。「めうじ」(85オ9)「はやうじ」(86オ4)「こうじ」「車うじ」「鼻切れうじ」(以上日葡辞書)。なぜ濁音形になるのかは未詳。

すはぶき(牛馬86オ2) せきばらい。『日葡辞書』には「Suabugi.」或は、それにまさった言い方として「Xiabugi.」と、古形の方を規範にかなった言い方と認めている。

どづく(鍋八撥89オ6) うちたたく。「どづく」(日葡辞書)の短呼形。

にぎはひ(鍋八撥91ウ1) 「にぎはひ」の転。a + ua の変化を背景に、「合フ」を連想したものか。

らいじやう(唐相撲93ウ10) 謡曲・狂言の囃子の一。「問の出羽に、太鼓に習あり。らんじやう、らいじやう、づどう、かどまぶりと云て、打分あり」(わらんべ草二)。「らいじょ」(来序)が原形で、「声」字にひかれて長音化したものか。

わごれう(老武者97ウ11) 対称の代名詞。和御寮。本資料では、その転化形「わごりょ」が普通に用いられ、長音形は三例(ここの例、八幡の前、武悪の「わごりゃ」は「う」脱か)見えるに過ぎない。

せいずれば(老武者99オ9) 制すれば。「制」はリ韻尾ではないから、「ず」の濁点は誤写か。

まところ(連歌十徳103オ1) 政所。『日葡辞書』には「まどころ」「まんどころ」両形が見える。

禪ヒトイラスト(大名狂言目次) 「一重素襖」の転化形。『篇目次第』には「禪」字に「ヒトヘキヌ」の訓がある。

かちん(麻生4オ2) 「褐」の字音の開音節化形「かち」に「ん」の添加したもの。濃い紺色。

とりわけ(蚊相撲41オ2) 本資料には「とりわき」三例、「とりわけ」二例、「とり分」一例、「取分て」一例が見える。「別而べつじといふをとりわきとやはらげていふが聞きくよう待ると云り。そのとりわきをとりわけといふは如何」(片言)

あらくもしい(今参43ウ10) 「荒くましい」の転。虎寛本では「あらくましい」(岩波文庫上二三八頁)とある。「暴雲フウクモ」(黒本本節用集)と書かれることがあるのも、この形があったからか。

しなひたりなりかな(秀句傘51オ1) 「しなひたるなりかな」(花子)の転か。「しなひたり」で感動詞のように使うので、その形にひかれたものか。

「ごあらぬ(粟田口57オ1)」「ござらぬ」の転化形。本資料には「ごあらぬ」の例がほかにもう一例「磁石」見える。誤写の可能性もなくはないけれども、湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』によれば、卑俗なことばとして元禄期の例が指摘されている。本資料に見える二例の使用者は、いずれも「心もすぐになひ者」で使用者としてはふさわしい。

ブゲン(粟田口60オ4) 分限。金持ち。室町時代には「ブンゲン」と「ブゲン」の両形が行われていたらしい。柳田征司『詩学大成抄の国語学的研究』一〇七頁、小野正弘「近世における「ブンゲン」と「ブゲン」——二重形における中立およびプラスの意味——」(国語語彙史の研究10 一九八九・一二)参照。

瓢ヒヤウ(文蔵74ウ8) 「ひさご」の音転化形。ひょうたん・夕顔などの総称。「ユフガホトイヘル ヒサク如何。瓢也。瓢匏ヒヤウモ同ジ。コレヲバヒサコトイヘル歟。田舎ニ桧物モナキアタリニハコノ瓢ヒヤウニテ水ヲバクミツカフ也」(名語記八)。ひさごを杓子(しゃくし)として使うところから、「ひさく」「ひしゃく」の形を生じたのであろう。「包瓜カウハ論語ニ包瓜ナレ也。繫カウテクラハレヌゾト云。ニガイヒシヤク(右傍)「ヒサコ

ト我ラハ云ゾ。如本)ヂヤホドニ繫カウテ食ハレヌゾ」(内閣文庫蔵元龜本『周易抄』五)。杓子の意の「ひしゃく」形は、「煎じ物」に一例「通円」に四例、「ひさく」形は「長光」「磁石」に各一例見える。

白カケレハ(文蔵74ウ8) 『源平盛衰記』からの引用で口語体の部分ではないけれども、形容詞のかり活用形が「か」形をとっている点で注目される。ただし、古活字版『源平盛衰記』は「白カリケレバ」に作る。柳田征司『室町時代の国語』、今野真二「大山祇神社連歌にみえるかり活用形容詞について」(松蔭女子短期大学紀要4 一九八八・一二)参照。なお、今野論文は、「よかあらふ」(棒縛)「よかあらふずるぞ」(たぐし)、「か」を見せ消ちとし、右傍に「う」と訂する、萩大名)をカ語尾の可能性のある例とした。

ぼうがしら(茫々頭80オ1) 「ぼう」は、髪カミの乱れているさまを表わす「ぼうぼう」の転。「球カカミモボウ／＼トシテ、ハダシデ走テ操ガ所エイテ、罪ヲユルシテタマワレトコウタゾ」(叡山本玉塵三六)鈴木博「オ段長音開合存疑例——アイソウ・ヒナタボツコウ・ボウ／＼ト——」(『国語史への道』上 三省堂 一九八一・六)によると、「ボウボウ」は、草のよく茂っている様子を表わす「バウバウ」(茫々)と、髪カミの乱れた様子を表わす「ボウソウ」(鬍髻)とが混淆したものと云う。

みぎり(富士松89オ3) 「みぎり(右)」については、山田忠雄「ミギとミギリ」(『古語記』言語・民族論叢 三省堂 一九五三・五)がある。「右民堂重」(日本館寄語)

ひんだ(靱猿93ウ11) 飛驒。濁音の前の鼻母音を撥音に発音して強調したもの。

よかあらふ(棒縛104ウ7) 「よからふ」が期待されるどころ。類例に「よかあらふずるぞ」(「か」を見せ消ちにし、右傍に「う」と訂する、

萩大名)がある。この形は、「御座ある」「御ざる」の二形が並存していたことに、同じく「—o— a」形ということで、ひかれて、「よからう」から生じていた形ではないか。「目近籠骨」の「じやあつた」参照。

どりや(太刀奪118ウ14) 「どれくをどりやく」(片言)

わごり(武悪135ウ3) 和御料。「わごりよ」の誤写かと見られるが、

この形が「水掛聲」「猿座頭」にも見える。

どうよくな(武悪135ウ6) 無慈悲であるさま。『Doyocun. 残忍。』

『Doyocuna. 残忍で無慈悲な人』(日葡辞書)「最前から色々の物かせといへども、かさなんでござる程に、どうよくな者じやとぞんぜう」

(鍋八撥)も、文脈からは欲張りの意とも解せるが、無慈悲の意か。

村上雅孝「どうよく(胴欲) どんよく(貪欲)」(『講座日本語の語彙』

11語誌3)参照。

みだき(武悪14オ8) サ行四段動詞「乱す」が、イ音便を起こして「み

だいて」となると、カ行動詞のイ音便形と区別がつかなくなり、数の

多いカ行動詞にもどしてしまった例と見られる。ただし、カ行形は髪

を乱す場合に限られ(くじ罪人・法師が母・鈍太郎)ており、その他

の場合には「乱す」が用いられている。これは、「みだく」の形が、

一方で、「さばき髪」などの「さばく」にひかれたことを語っている

ものと見られる。「かみをみだし」(ばくらう)の例も一例見える。柳

田征司「活用語の語幹末に生じた母音連続(続)(下)」(国語国文

一九八五・六)参照。

ほおん(梟81ウ10) ふくろうの鳴き声。山口仲美「狂言の鳥声(2)——

「ほおん」は梟声か——」(日本語学 一九八五・一一)によれば、「ほ

ほん」の誤記。「梟よのほん所かとの暮」(小林一茶『七番日記』

がしん(朝比奈1オ6) 餓死。本資料には七例見えるが、いずれも「地

獄の餓死以ての外な(に)」という文脈に現われる。しかし、『片言』に「餓死を。がしん」とあるところから見ても、かなり広く行われていた転化形と見られる。語末の一拍節の字音語に「ん」を添加する例は中・近世に少なくない。「がしん」の場合は、和語が「しに」であることも「ん」添加にかかわっているか。「なんば」「かんきん」の項参照。

も(朝比奈3ウ2) もう。「今」の転じた「マ」が長音化した「マウ」の開合混同形「モウ」。あるいは表記通りその短呼形。

なひがま(朝比奈6オ2) 「なひがま」(雑鎌)のイ音便。「猪の目彫りたる鉞、ないかま、熊手舟にからりひしりと取入れて」(義経記四)

おぬに入かやぜうびたけ(餌差13オ9) 「尉鷄」(ぜうびたけ)という

名前から「老に入かや」と冠した。「ぜうびたけ」は「ぜうびたき」

の転。

あひそ(首引29オ7) 従来「あいさう」(愛想・愛相)の転とされて

きたが、鈴木博「オ段長音開合存疑例——アイソウ・ヒナタボツコウ・

ボウノト——」(『国語史への道』上 三省堂 一九八一・六)は、

「愛想」「愛相」の古い例が見つからず、合音形「アイソウ」の方が

早く見えるところから、「アイソウ」(愛崇)が原形ではないかとする。

あかがり(輝80ウ1) あかぎれ。『狂言記』「あかがり」では、普通の

会話中に二例新しい「あかぎれ」が用いられており、題と歌(三例)

とに古い「あかがり」が用いられている。新しい「あかぎれ」は「切

れ」と見た民衆語源解から生まれた形か。

ゑくぼが両のほに(枕物狂65ウ9) 「頬渦 但覚ッ両—生ッ微—」

(坡) 女房ノウツクシイカ笑テ両方ノホウニウツクシウエクボノア

ツタフソ。渦ハ水ノウズヲ云ソ。ホウノエクボハ水ノウズノマウタヤ

ウナゾ。マルウクホイソ」(玉塵五〇52オ)「ほ」は長音形を短音形で

表記したのか。短呼形も存したか。早く『名語記』に「ほ」の例がある。

なにしあふ(箕被79オ1) 「名にし負ふ」。合音形であるべきものを開音形に表記したものの。「名にし負ふ」全体が一語化し、理解語彙化していたために、そのような表記が生まれたものかと言う。山内洋一郎『中世語論考』(清文堂出版 一九八九・六) 参照。「ならのあたりをかすかなりけり 聖善/名にしあふ古き都の跡とへは 清派」(大山祇神社連歌文明十五年千句第三)

びくにん(若市103オ2) 比丘尼。「若市」に見える三例はいずれも「ん」を見せ消ちとするが、「比丘定」の二例はそのままとなっている。「比丘尼を〇びくにん」(片言)。「人」を連想したものであろう。「餅酒」の「かんきん」(寒気)、「朝比奈」の「がしん」(餓死)を参照。

かな若(金若102オ2) 平安初期の名絵師、巨勢金岡。「かなわか」とも発音されていたらしい。「彼清涼殿ノ画図ノ御障子ニハ昔シ金若カ書ケル遠山ノ月モ有トカヤ」(屋代本平家物語一)。田口和夫「狂言のことば」(一)(国立能楽堂 一九八八・八) 参照。

ぢよろ(悪坊40ウ6) 「じょうらう」(助老)の転化形。「Ioro. 座敷(Zaigaku)で老人やその他の人々に用いられる、短くて小さい杖のような物で、下顎をその上にもたせかけて支える物」(日葡辞書)「助老をぢよろ」(片言)

おどれは(悪太郎41ウ18) 『大蔵狂言集総索引』は対称の人称代名詞とする。『狂言記』正篇には二例その例が見えるが、虎明本狂言は「おのれ」のみである。ここはト書きの部分であって、上の「はやむれば」に対して、「踊れば」であろう。後に「おどりねんぶつ」と見える。

のばら(悪太郎42ウ9) 野原。「Nobara」(日葡辞書)「老馬デ用ニタ、ヌホドニゾ。草枯テ原ノ野北風寒シ野バラヘヲイ出ノ放ゾ」(中興

禅林風月集抄33オ10)

あんなみ(仏師48ウ4) 安阿弥。運慶の弟子、快慶。この語、天理本でも『狂言記』正篇でも連声形で表記されている。大倉浩『狂言記』

(正篇)の連声表記をめぐって(上越教育大学国語研究四 一九九〇・二) 参照。

月の光花のかげ何かこよひのおもひでならん(花盗人72ウ9) 謡曲「泰山府君」の「霞の光、花の色、なにか今宵の、思ひ出ならぬさりながら、あはれ一枝を(下略)」による。「おもひでならん」の「ん」は、謡曲の本文から見ても打消の助動詞「ぬ」を「ん」と表記したものと見られる。打消の助動詞「ぬ」を「ん」と表記した例は、早くは文語文に現われる。

もなある(鱸脩丁104オ2) 「もなる」の転。来る・する・食うなどの意味を表わす敬語動詞。また、() であるの意味を表わす補助動詞としても用いられる。森田武「敬語「もなる」について」(国語国文 一九七一・七) 参照。

まうかうかひ(牛博旁118オ1) 妄語戒。「かう」は単なる誤写の可能性が大きい。『片言』に「所務を〇しやうぶ」「所分を〇しやうぶわけ」と、短音の長呼例が見えるから、その可能性も残る。

せりふ(万集類目次) 台詞。音転化の法則からは原形は、「せりあふ」よりは「せりいふ」がよい。「ふ」がハ行転呼を起こしていないのが注目される。

(一九九三年一〇月二日受理)